

桜庭 芳露（さくらば・ほうろ）

1、プロフィール

本名猛彦。初め文芸誌「黎明」等により、短歌を志したが、福士幸次郎の指導を受け、一戸謙三らとパストラル詩社を結成し、青森県詩壇の草創期に活躍した詩人である。

<生没>

1894(明治 27)年8月 28 日 ~ 1948(昭和 23)年2月 24 日

<代表作>

詩集『桜庭芳露第一詩集』

<青森との関わり>

弘前市田代町に生まれる。七戸尋常高等小学校、弘前市の和徳尋常高等小学校に勤務後、大正 12 年上京。

2、作家解説

桜庭芳露(本名猛彦)は、明治 27 年、弘前市に生まれる。青森師範学校を卒業後、和徳尋常高等小学校訓導を 11 年間勤めた。その間、大正8年には、文芸誌「黎明」に短歌を投稿し始める。同年9月には後藤健次、一戸謙三、安田聖一らと共にパストラル詩社を結成し、在京の詩人福士幸次郎より直接指導を受ける。また黒石市から創刊された詩誌「胎盤」にも同人として参加し、後進の指導的立場にあった。後藤が上京したため、パストラル詩社の事務局を引き継ぎ、大正 12 年まで経営を担当する。

大正 12 年2月、上京。のちに東京日日新聞社(現毎日新聞社)に入社。校正部に勤務する。同 15 年6月には、詩誌「地上樂園」(白鳥省吾主宰)創刊と同時に同人となり、昭和3年5月、大地舎から地上樂園叢書第七編として、『桜庭芳露第一詩集』を刊行。その後も郷土の文芸誌「座標」などの雑誌や新聞に詩作品を発表している。

桜庭芳露の詩風の特徴は、“心の眩きと叫びとよりまじったものにふさはしい長い行が、波のうねりのやうに折り重って人に逼ってくる。それは心の明暗の隅々まで表現しやうとする執拗なほどのデリカシイである”(白鳥省吾序)といわれるように、彼は東京に在りながら、つねに北方の風土と精神性を失わず、たえず、郷里弘前への断ちがたいあつい想いに囚われていたことがわかる。大都会東京は、詩人にとっては、“異郷”でしかなかったのであろう。

桜庭芳露が、54才の若さで亡くなったのは、昭和23年2月、終戦後まもない荒廃した時代であった。「第一詩集」に続く詩集は、ついに日の目を見ることがなかった。上京した直後に関東大震災に見舞われ、晩年を第二次世界大戦を経験した詩人にとって、それは長いトンネルを潜り抜けた瞬時の死であった。

(『青森県詩集』上巻 参照)

3、資料紹介

○『桜庭芳露第一詩集』

図書

1928(昭和3)年5月30日

175mm×125mm

パストラル詩社で活躍した芳露は、大正12年に上京し、昭和に入り詩誌「地上楽園」に拠って活躍している。第一詩集には、大正7年から昭和3年までの詩47篇が収められている。序には福田正夫、白鳥省吾、跋には福士幸次郎が文章を寄せている。